

P6. 岡山県高梁川下流域の地形と倉敷市の洪水ハザードマップ

久保純子（早稲田大）・藤川宏治（元早稲田大・院）

Sumiko KUBO and Koji FUJIKAWA: Geomorphological features of the Lower Takahashi River Plain and flood hazard map of Kurashiki city

岡山県高梁川下流平野の地形調査をもとに、「洪水ハザードマップ」の課題を考察した。高梁川下流は丘陵地を除くとデルタ・干拓地・埋立地が大部分で全体に低平である。1893（明治26）年の洪水を機に東高梁川を廃川化し、それ以降は外水洪水は発生していない。下流左岸に位置する倉敷市では、2005年6月に縮尺1/15,000の「洪水避難地図」を作成し、配布した。それによれば、浸水想定地域内に多くの避難場所が位置し、避難場所の配置や避難経路についての検討が必要である。また、内水・高潮への対応とともに、天井川であった旧東高梁川廃川地の洪水対策上の意義など、地形や土地のなりたちに関する情報が必要である。

キーワード：高梁川，平野の地形，倉敷市，洪水ハザードマップ

P7. 二、三の花崗岩斜面における土層形成速度と崩壊周期について

若月 強（防災科学技術研究所）・松倉公憲（筑波大）

Tsuyoshi WAKATSUKI and Yukinori MATSUKURA: Recovery rates of soil layer in the soil-slip scars and return period of soil slips on the granitic mountains

表層崩壊には周期性が存在することが知られている。表層崩壊地の土層は、風化層と周囲の斜面からの運積土から構成されることが考えられているが、風化現象そのものは、大まかには拡散方程式によって近似できると考えられている。そこで、茨城県多賀山地・愛知県豊田市・鹿児島県紫尾山地に分布する4種類の花崗岩斜面において、形成年代の異なる崩壊地で得られた土層の単位体積重量や簡易貫入試験値の深度分布が、風化を想定した拡散モデルによって説明できるかについて検討し、さらに土層形成速度（回復時間）と崩壊周期を推定した。その結果、花崗岩斜面の崩壊地における土層形成プロセスは、岩質の違いによって、拡散型と側方流型に分類することができた。拡散型は、 SiO_2 含有量が少ない花崗岩に見られ、モデルの拡散係数 D 値は大きく、モデルで想定した地表面から拡散的に進行する風化作用により土層が形成されることが考えられる。一方、側方流型は、 SiO_2 含有量が多い花崗岩に見られ、モデルの D 値は小さく、崩壊後数10年程度は主にモデルで想定した地表面から拡散的に進行する風化作用により土層が形成されることが考えられるが、崩壊後10年後以降はモデルだけでは説明できず、飽和側方流による土層形成作用も働いている可能性がある。崩壊地における土層回復時間（崩壊周期）は、拡散型では150～250年、側方流型では100～150年と見積もられた。

キーワード：表層崩壊，土層形成速度，風化，花崗岩，拡散方程式

P8. 赤石山脈・アレ沢崩壊地頂部における岩盤斜面の地表面移動速度の季節的変動

西井稜子（筑波大・院）・松岡憲知（筑波大）

Ryoko NISHII, Norikazu MATSUOKA: Seasonal variation of the surface velocity in the head area of the Aresawa rock slide, Akaishi Range

赤石山脈・間ノ岳（3189 m）の東斜面に位置するアレ沢崩壊地では、2004年春に大規模な岩盤崩壊が発生し、斜面頂部には多数のテンションクラックが形成された。この崩壊斜面頂部において、2006年10月14日～2008年7月1日までトータルステーション測量および気象パラメーター（気温、地表面温度、降水量、積雪）の観測をおこなった。地表面移動量の分布図が